【原 著】

神経難病患者・介護者における補完代替医療利用の実態調査 Use of Complementary and Alternative Medicine by Intractable Neurodegenerative Patients and Caregivers

紀平為子^{1,*}, 岡本和士², 吉田宗平¹, 若山育郎¹, 吉備 登³
Tameko KIHIRA^{1,*}, Kazushi OKAMOTO², Sohei YOSHIDA¹,
Ikuro WAKAYAMA¹, Noboru KIBI³

¹ 関西医療大学保健医療学部神経内科

² 愛知県立大学看護学部公衆衛生学

³ 関西医療大学保健医療学部鍼灸学科

【要 旨】

神経難病患者における補完代替医療 (CAM) の利用に関する実態調査の報告は極めて少ない。本研究の目的は、神経難病患者の CAM 利用の実態を把握し今後の難病療養の基礎資料として役立てることである。対象は、和歌山県内の筋萎縮性側索硬化症、パーキンソン病と関連疾患、脊髄小脳変性症、スモン患者 1,406 名と、介護者 (対照) とした。あんま・マッサージ・指圧、鍼灸、柔道整復、漢方、健康補助食品について質問票を郵送し、無記名回答で回収した。回収率は患者 33.7%、対照 30% で、回収率から求めた CAM 利用割合は、神経難病患者 20.5%、対照 9.8% であった。「あんま・マッサージ・指圧」が神経難病患者に最も利用されており、利用患者の 51.3% が「痛みの軽減や動きの改善などに効果あり」と回答した。本療養法は対照でも 32.4% で利用され、その 62.8% で効果ありとされた。効果ありと回答した神経難病患者および対照では主観的健康感が良好である者が有意に多かった。根治療養法が未だない疾患を有する患者と介護者において療養生活上での症状や心身の負担軽減に対して CAM 利用が選択肢の一つとして有用と考えられた。

【キーワード】

神経変性疾患患者、パーキンソン病、利用頻度、効果、介護者

はじめに

補完代替医療 (CAM) は西洋現代医学領域以外の全ての医療の総称で、一般的に毒性や侵襲性の低い治療法との印象があるため日常的に受け入れられやすい傾向がある。Eisenberg らは、アメリカ国民の CAM 利用率は 42.1%、一方日本では 65.6% と報告している¹⁾。神経難病を有し療養中の患者では、現代医療と併用して症状緩和のため CAM を利用する機会が増加していると推察される。しかしながら、我々の渉猟した限り神経難病患者における CAM 利用の実態に関する報告は極めて少ない。本研究は、CAM 利用の実態と効果に関する利用者の評価を把握し、今後の神経難病療養上での CAM の有用性を考える基礎資料として役立てる事を目的とした。

方法

和歌山県内の厚生労働科学省難治性疾患克服研究事業で指定されている特定疾患のうち、筋萎縮性側索硬化症 96 名、パーキンソン病 1,048 名、パーキンソン病関連疾患 (多系統萎縮症、進行性核上性麻痺、大脳皮質基底核変性症) 89 名、脊髄小脳変性症 155 名、スモン 18 名の患者、計 1,406 名と対照として健常な介護者もしくは患者の家族 1,406 名を本研究の対象とした。本研究では CAM として「あんま・マッサージ・指圧」、「鍼灸」、「柔

受理日: 2010 年 8 月 23 日

* 〒590-0482 大阪府泉南郡熊取町若葉 2-11-1 関西医療大学保健医療学部 Tel: 072-453-8251 Fax: 072-453-0276

E-mail: tkihira815@kansai.ac.jp

道整備（接骨）」、「漢方（医院や薬局で処方されるもの）」、「健康補助食品」について調査した。質問票には1) 年齢, 2) 性別, 3) 疾患名, 4) 介護度, 5) 日常生活の状況（1: 仕事や家事ができる, 2: 近所までの外出は一人でできる, 3: 身の回りのことは一人でできる, 4: 身の回りのことに介助が必要, 5: 寝たり起きたり, 6: 座れるが主として寝たきり, 7: 胃瘻造設している, 8: 呼吸器を使用している), 6) 現在の全般的な健康状態（1: 療養中であるが病状は落ち着いており, 気分は良い, 2: 療養中であるが, 気分はまあまあ良い, 3: 全般的にあまり良くない, 4: 良くない), 7) 一年前と比べて日常生活の状況の変化（漠然とした体の不調, 病状の進行, それぞれについて1: 増えた（悪くなった）, 2: 変わらない, 3: 減った（良くなった）), 8) 最近一年間で利用した補完代替医療について（利用した補完代替医療の種類, 頻度, 効果（1: あり, 2: なし, 3: 不明）, 9) 効果の内容, 10) 補完代替医療を利用するに際して主治医に相談したか, などの質問項目, 全10問とした。本アンケート用紙を郵送法にて患者宅に送付し, 回答は個人情報保護のため無記名とし返信用封筒にて回収した。患者住所は, 和歌山県庁福祉保健部健康局難病・感染症対策課から「特定疾患治療研究事業における臨床調査個人票の研究目的使用に関する要綱」に基づき住所ラベルの提供を受けた。調査期間は平成20年6月1日から同年8月31日とした。本研究は平成20年度関西医療大学倫理審査会で承認された。

結果

1. 神経難病患者のCAM利用実態について

全対象者のうち, 神経難病患者では33.7%から, 対照では30.2%から有効回答が得られた。回答した患者と対照の属性と日常生活状況を表1に示した。患者と対照の男女比に有意差を認めなかった。患者の平均年齢は対照のそれより有意に高齢であった。疾患別ではパーキンソン病が62.5%と最も多く, 次いで脊髄小脳変性症, パーキンソン病関連疾患, ALSがそれぞれ10%前後であった。患者の日常生活状況については, 身の回りのことに介助を要する者が44.1%と最も多く, 次いで寝たり起きたり, あるいは座れるが主として寝たきりの者が約20%, 胃瘻造設11.4%, 呼吸器使用7.4%の順であった。患者の介護度は, 要支援（社会的支援を要する）と要介護度1または2（部分的か軽度の介護を要する）の患者を合わせて50.2%, 他は要介護3以上であった。患者では, 現在の健康状態について「良い」, 「まあまあ良い」と回答した者は55.3%, 「あまり良くない」「良くない」が44.6%であった。

表1 回答した患者と介護者の属性と日常生活状況

	患者 (%)	対照 (%)
回収率	33.7	30.2
年齢 男性 (Mean±S.D.)	69.1±11.3 歳	64.8±14.1 歳
女性	72.4±10.4 歳	61.7±13.7 歳
<50	4	12.7
50-59	10.5	23.6
60-69	22.5	28.8
70-79	37.7	28.4
80 歳以上	22.3	6.5
性 男性	43.9	36.2
女性	56.1	63.8
特定疾患の病名		
パーキンソン病	62.5	
脊髄小脳変性症	12.8	
パーキンソン病関連疾患	9.6	
筋萎縮性側索硬化症	8.6	
スモン	1.6	
その他	1.4	
日常生活状況（複数回答可）		
仕事や家事ができる	17.6	
近所まで外出は一人でできる	27.3	
身の回りのことは一人でできる	37.6	
身の回りのことに介助が必要	44.1	
寝たり起きたり	19.3	
座れるが主として寝たきり	17.3	
胃瘻を造設している	11.4	
呼吸器を使用している	7.4	
患者の介護度		
要支援	17	
要介護度1	11.6	
要介護度2	21.6	
要介護度3	12.8	
要介護度4	10.9	
要介護度5	26.1	
主観的健康状態		
良い	17.2	6.5
まあまあ良い	38.1	56.5
あまり良くない	37.5	30.7
良くない	7.1	6.3

神経難病患者のCAM利用実態を把握するため, 月1回以上利用するCAMの利用割合を表2に, 疾患別のCAM利用頻度について図1に示した。

疾患別に「効果あり」と回答（複数回答可）したCAMの種類を図2に示した。

患者が「効果あり」と回答した具体的内容については図3に示した。

次に患者の介護度と「あんま・マッサージ・指圧」の効果については図4に示した。

西洋医学による医療とCAMを併用している患者で

表 2 月 1 回以上利用する CAM の種類

	患者		対照	
	月 1 以上利用する割合 (%)	効果あり (%)	月 1 以上利用する割合 (%)	効果あり (%)
あんま・マッサージ・指圧	60.8	51.3	32.4	62.8
鍼灸	30.9	32.4	14.1	29
柔道整復	18.8	26.8	14.2	37.6
漢方	31.8	42.2	17.4	35.3
健康補助食品	40.5	25.8	42.5	35.9

図 1 疾患別 CAM の利用状況の比較

スモン、ALS、パーキンソン病、パーキンソン病関連疾患、脊髄小脳変性症の全てで、「あんま・マッサージ・指圧」の利用が最も多かった。スモンでは次に「鍼灸」の利用が多いことが特徴であった。ALS、パーキンソン病、パーキンソン病関連疾患、脊髄小脳変性症では、「あんま・マッサージ・指圧」の次に「健康補助食品」の利用が多く、「鍼灸」「漢方」がほぼ同様の利用頻度であった。SMON：スモン、ALS：筋萎縮性側索硬化症、PD：パーキンソン病、SCD：脊髄小脳変性症。

図 2 疾患別「効果有り」と回答した CAM の割合

スモンでは回答者全員が「漢方」は有効と回答した。ALS では「あんま・指圧・マッサージ」が 60%、「鍼灸」は 50% で「効果あり」と回答したが、「漢方」や「健康補助食品」では 33% にとどまった。パーキンソン病では 55% の患者が「あんま・指圧・マッサージ」、42% の患者が「漢方」は「効果あり」と回答した。パーキンソン病関連疾患では、50% の患者が「柔道整復」は「効果あり」と回答した。脊髄小脳変性症では「漢方」が最も「効果あり」とされ、次いで「あんま・指圧・マッサージ」の順であった。SMON：スモン、ALS：筋萎縮性側索硬化症、PD：パーキンソン病、SCD：脊髄小脳変性症。

図 3 患者が「効果有り」と回答した効果の内容

「あんま・指圧・マッサージ」では、「痛みが軽くなった」が 36.2% と最も多く、次いで「動き易くなった」27.7%、「気分が楽になった」24.5% 等であった。「鍼灸」では、「気分が楽になった」が 40.4% と最も多く、次いで痛みの軽減 (19.1%) や動き易さ (17.0%) に効果があると回答された。「柔道整復」、「漢方」、「健康補助食品」では、選択肢以外の「その他」がそれぞれ 47.1%、46.0%、58.2% 等となっていた。

介護度の%

図 4 介護度と「あんま・マッサージ・指圧」の効果

患者の介護度と「あんま・マッサージ・指圧」の効果について示した。要支援と介護度 1 の患者では「効果あり」と回答する者が 60-70% と高く、一方介護度 3-5 では「効果あり」との回答は平均 46% に止まり、「効果不明」とする者が約半数であった。

は、CAM 利用について主治医に相談した者 50.2%，相談していない者 49.8%であった。

II. CAM の利用と全般的健康感について一患者と対照の比較

「あんま・マッサージ・指圧」の利用割合は、神経難病患者では60.8%，対照32.4%であり、神経難病患者で有意に多かった ($p<0.05$) (表 2)。CAM の利用頻度の最も高かった「あんま・指圧・マッサージ」について効果と健康感の関連を検討した。「あんま・指圧・マッサージ」の「効果あり」と回答した神経難病患者のうち 66%において、全般的な健康状態が「病状は落ち着いており気分が良い・気分はまあ良い」と回答し、これは「良くない・あまり良くない」と回答した患者割合に比し有意に多かった ($p<0.05$) (表 3)。パーキンソン病患者に限っても、「効果あり」と回答した患者のうち 65.2%が「病状は落ち着いており気分が良い・気分はまあ良い」と回答し、「あまり良くない・良くない」と回答した患者割合 34.8%に比し有意に多かった ($p<0.05$) (表 3)。さらに、「あんま・マッサージ・指圧」に「効果あり」と回答した患者では、患者全体での「現在の全般的な健康状態が良い・まあ良い」の割合 55.3%に比べても高く、対照の 63%とほぼ同様であった (表 1)。患者では、「あんま・マッサージ・指圧」について、「効果の有無」と「全般的な健康状態の良しあし」との間にゆるい正相関を認めた (Spearman 相関係数 0.205, $p=0.005$)。一方、対照では、「あんま・マッサージ・指圧」の効果と「現在の全般的な健康状態の良しあし」には有意な相関を認めなかった。

一方利用割合が2番目に多かった「健康補助食品」の効果については、69.9%の患者が「効果不明」と回答した。主観的健康感と「健康補助食品」, 「漢方」, 「鍼灸」, 「柔道整復」の各々の効果の有無に関して有意な相関関係を認めなかった。

最近一年間の患者の健康状態の変化と「あんま・指圧・マッサージ」の利用頻度を比較した。利用患者では1年前と比較して漠然とした体の不調が増えた者の割合 73.8%で、病状悪化したと回答した者の割合 69.7%であったが、一方非利用患者でも体の不調が増えたと回答した者の割合 67.8%，病状悪化したと回答した者の割合 62.4%であり、両者に有意差を認めなかった。最近一年間の漠然とした体の不調の増加や、「病状悪化した」と感じたことと「あんま・指圧・マッサージ」の利用頻度とは関連が認められなかった。

「鍼灸」, 「柔道整復」の利用は患者、対照で有意差を認めず、「効果あり」の割合も患者と対照で有意差を認めなかった。「漢方」の利用は患者で対照に比し多い傾向で、「効果あり」の回答は対照に比し患者の方が多い傾向であったが有意差を認めなかった。「健康補助食品」の利用割合は患者、対照でほぼ同数で、「効果あり」の回答に有意差を認めなかった (表 2)。

考察

本研究では、神経難病患者の CAM 利用実態を把握することを第一の目的にした。また、神経難病に対する CAM の作用機序が必ずしも明らかでないため、本研究では患者の自覚的有効性と全般的健康感を CAM の評価に使用した。

本研究による回答率から換算した CAM の利用割合は、神経難病患者では 20.5%，対照では 9.8% (それぞれ回答者の約 60.8%，30.2%) と推察された。本研究の結果からは、神経難病患者において、対照に比し有意差をもって効果のある CAM は認められなかったが、神経難病患者では、「あんま・マッサージ・指圧」が最も利用され、症状緩和や全般的健康感 (気分が良いという状態) の向上に効果があると考えられた。

表 3 「あんま・マッサージ・指圧」の効果と主観的健康感

		健康状態			χ^2 乗検定 (Fisher 直接法)
		良い・ まあ良い	良くない・ あまり良くない	合計	
全患者	効果あり	64	33	97	$p<0.05$
	効果なし	10	10	20	
	効果不明	30	40	70	
パーキンソン病患者	効果あり	45	24	69	$p<0.05$
	効果なし	8	5	13	
	効果不明	19	27	46	
対照	効果あり	57	30	87	$p<0.05$
	効果なし	4	9	13	
	効果不明	20	18	38	

これまで神経難病患者において CAM 利用と主観的効果について検討した研究は極めて少ない。パーキンソン病患者における CAM の普及の実態を調査した大越らの報告によると、運動療法・理学療法を実施している患者は 55%であり、一方漢方薬の服用 11.7%、鍼灸 3.3%、あんま・マッサージ治療 11.7%などとされている²⁾。日本神経内科専門医を対象としたアンケート調査では、76.4%の医師がパーキンソン病患者に運動療法・理学療法を実施し、さらに 29.8%の医師があんま・マッサージ治療の紹介あるいは推奨、14.7%で鍼灸治療の紹介・推奨、5.9%で漢方薬の処方が行なわれていた²⁾。このように、パーキンソン病に対するあんま・マッサージ療法の比較的多く、主に自覚的改善を目的として利用されている。これは、本研究とはほぼ同様の結果と考えられた。

本研究において、神経難病患者では「あんま・マッサージ・指圧」、「健康補助食品」、「漢方」の利用割合が多く、自覚的効果も高かった。さらに、「一年前に比して病状が進行・悪化している」かどうかとは関係なく、「全般的健康感」改善に有効であったことから、CAM 療法は神経難病患者の症状緩和に有効と考えられた。今後、客観的効果判定と作用機序の解明が課題と考えられる。また本調査から、我が国では主治医に相談せずに CAM を利用している患者が約半数いることが明らかになった。患者が主治医に CAM 利用に関して躊躇無く相談できるためにも、一般人のみならず医療関係者についても CAM の理解と普及の啓発活動が必要と考えられた。

文献的には、癌患者を対象とした CAM 研究が多く、米国、英国、ドイツなどでは癌患者の 40–60%で CAM の利用が報告されている^{3,4)}。これらの国では、CAM に関する各種データベース作成や研究機関・研究者間ネットワーク構築が進められ、さらに癌患者向けの CAM 指導書の提供など積極的な研究と啓発がなされている。英国では、癌患者のペインコントロールのため、医師の約 70%が鍼灸治療を利用しているとされ、その他マッサージやアロマセラピー、リフレクソロジーなども 70–80%の臨床現場で活用が報告されている。日本においては、癌患者の 44.6%が 1 種類以上の CAM を利用していることが示され、また、日本の特徴として健康食品の利用頻度が 96.2%と極めて高いことが指摘されている^{4,5)}。CAM は癌の進行抑制、症状緩和などの他、生活習慣病、アレルギー、感染症、自己免疫疾患など広い領域にわたって効果が期待されている⁶⁾。さらに、健康成人におけるマッサージ療法の効果の検討では、不安の軽減効果、免疫力および血清脂質濃度に影響を与えることが示されている⁷⁾。今後、神経疾患においても疾患別に CAM の効果を自覚的のみならず科学的に実証していく必要がある。

結論

本研究では、回答率から換算した CAM の利用割合は神経難病患者では 20.5%、対照とした介護者では 9.8%であった。患者に利用されている CAM の内訳は、「あんま・マッサージ・指圧」が 60.8%と最も多く、次いで「健康補助食品」40.5%、「漢方」31.8%であり、自覚的な症状緩和や全般的健康感（気分が良いという状態）の向上に有効と考えられた。神経難病患者では、「鍼灸」や「柔道整復」の利用割合はそれぞれ 30.1%、18.8%と多くはなかったが、利用者では効果ありの回答が多い傾向を認めた。さらに CAM の「効果あり」と回答した患者では、主観的健康状態が良好と感じている者が多かった。根治療法が未だ確立されていない疾患を有する患者において、CAM が症状緩和に有効との結果が得られたことから、神経難病患者の身体的及び精神的負担の軽減に対し CAM の利用が選択肢の一つとして有用性を示すものと考えられた。

助成源

研究資金の一部は厚生労働科学研究費難治性疾患克服研究事業スモンに関する調査研究班、同特定疾患の疫学に関する研究班から助成を受けた。

参考文献

- 1) Eisenberg DM, Davis RB, Ettner SL, et al. Trends in alternative medicine use in the United States, 1990–1997: results of a follow-up national survey. JAMA 1998; 280: 1567–1575.
- 2) 大越教夫. パーキンソン病における補完代替医療に関する実施状況—患者および神経内科専門医に対するアンケート調査—. 筑波技術大学テクノレポート. 2007; 14: 207–210.
- 3) Hyodo I, Amano N, Eguchi K, et al. Nationwide survey on complementary and alternative medicine in cancer patients in Japan. Journal of Clinical Oncology 2005; 23: 2645–2654.
- 4) 大野 智, 鈴木信孝, 井上正樹. がんの補完代替医療 (1). 総合臨牀. 2005; 54(10): 2765–2771.
- 5) 兵頭一之介. 癌の補完代替医療. 日本補完代替医療学会誌. 2004; 1: 7–15.
- 6) 伊藤寿記, 甲斐康之, 井倉 技ら. 補完医療と粘膜免疫—炎症性腸疾患の最近の話題—. 日本補完代替医療学会誌. 2008; 2: 85–101.
- 7) 栗山洋子, 渡辺総子, 忠井俊明ら. 成人被験者に対するマッサージの免疫学的, 血液学的, 心理学的効果. 日本補完代替医療学会誌. 2005; 2: 59–65. 総合臨牀. 2005; 54(10): 2765–2771.

ABSTRACT

Use of Complementary and Alternative Medicine by Intractable Neurodegenerative Patients and Caregivers

Tameko KIHARA¹, Kazushi OKAMOTO², Sohei YOSHIDA¹, Ikuro WAKAYAMA¹, Noboru KIBI³

¹ *Department of Health Sciences, Kansai University of Health Sciences*

² *Department of Public Health, Aichi Prefectural College of Nursing and Health, Nagoya*

³ *Department of Acupuncture and Moxibustion, Kansai University of Health Sciences*

Objective: We aimed to characterize patterns of use of complementary and alternative (CAM) therapies on patients with intractable neurodegenerative diseases and their caregivers.

Methods: We sent questionnaires to 1,406 patients with subacute myelo-optico-neuropathy (SMON), amyotrophic lateral sclerosis (ALS), Parkinson's disease (PD), Parkinson related disease, or spino-cerebellar degeneration (SCD). We also send questionnaires to the 1,406 caregivers of these patients. The participants were asked to answer questions about current use of Annma/Massage/Shiatu, acupuncture, Zyudoseifuku, Chinese medicine or Supplementary food. Other questions including reasons for the use, subjective effectiveness of the CAM and subjective wellness were also asked.

Results: 33.7% of patients and 30% of caregivers responded to the questionnaires. Anna/Massage/Shiatu and Chinese medicine were most frequently used by patients (60.8%), and 51.3% of them answered that these therapies were effective. The caregiver's response showed supplementary food and Anna/Massage/Shiatu were most frequently used (42.5%), and 35.9% of them answered that these were effective.

Conclusion: The present study showed that use of CAM was 20.5% in patients with intractable neurodegenerative diseases and 9.8% among caregivers when calculated using collection rates. Annma/Massage/Shiatu was most frequently used and was regarded effective on subjective wellness both in the patients and caregivers.

Key words: Patients with neurodegenerative disease, Parkinson's disease, usage, caregivers